

日本経済の読み方④

輸出

輸出は、海外経済の動向を直接反映するGDPの支出項目です。



ぶぎん地域経済研究所専務取締役 土田 浩

前回、前々回と、GDPの支出項目のうち、国内需要の2つの柱である個人消費と設備投資をみてきました。今回は、海外からの需要である輸出について解説します。

輸出の増減要因は、第一に海外経済、第二に為替相場です。海外の景気が拡大すれば海外からの需要が増加します。また、円安になれば、現地通貨建て販売価格に低下余地が生じて価格競争力が高まるため、需要が増加しやすくなります。

<景気分析における輸出の位置づけ>

初回のGDPの説明の中で、例えば消費⇒生産⇒所得⇒消費といった経済の循環メカニズムの話をしてきましたが、輸出はその外側で、海外経済や為替相場の影響を受けて独立的に動く指標です（この意味で「外生変数」と呼ばれます）。輸出が増加に転じれば、国内の生産活動が刺激されます。逆に海外において何らかのショックが生じれば、輸出の減少を通じて国内経済に急ブレーキをかけることもあります。輸出の動向は、国内景気変動の出発点になるケースが多いという意味で、景気分析において重要な項目です。

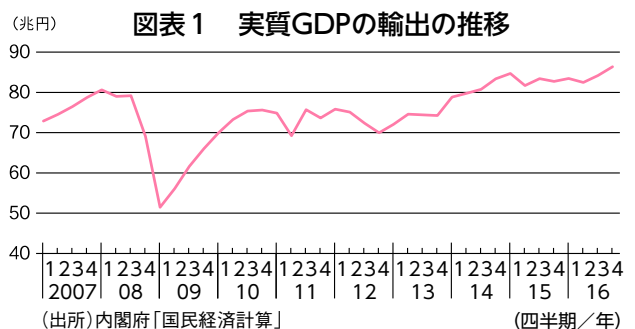
因みに、輸入については、わが国の景気情勢の結果という色彩が強いため、景気分析の観点からは重要度が低いと言えます。ただ、輸入はGDPの控除項目ですので、GDP成長率に占める「外需」寄与度などをみる際には、輸出から輸入を差し引いた「純輸出」を指していることに留意してください。

<近年の輸出の推移>

それでは、まず、近年の実質GDPの内訳から、輸出の推移を振り返ってみましょう（図表1）。

2008年秋から09年前半にかけては、海外で発生したリーマンショックの影響で、輸出は急激かつ大幅に落ち込みました。これが国内の生産・雇用を直撃し、企業収益・雇用者所得の減少を通じて、設備投資・個人消費を下押ししたことはご記憶のとおりです。

2012年には中国の景気減速を主因に弱含みましたが、13年から14年にかけては、為替相場が1ドル80円前後から120円前後まで大きく円安方向に変化したことから、再び増加に転じました。その後しばらくは横ばい状態でしたが、16年後半から、世界経済の持ち直しの動きを受けて、再び増加に転じています。この内訳をみると、米国向けの自動車、中国向けのIT関連（スマートフォン用等）が牽引役となっています。



<足もとの輸出動向をみる指標>

次に、足もとの輸出の動きを知るための月次指標を2つ紹介しましょう。

一つは、財務省が作成する「貿易統計」の